

教 仏 名 聞

第66号
(発行日)
2016年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

顔 容 端 正 た ぐ い な し

顔容端正たぐいなし

精微妙軀非人天

虚無之身無極体

平等力を帰命せよ

(浄土和讃)

現代語訳 (阿弥陀如来のお浄土の聖者方は、顔かたちが整い勝れておいでになり、姿形のすばらしいことはとてもくらべるものがない。清らかなで美しく、高尚深遠なおからだは、人間や神々をはるかに超え勝れておいでになる。しかも色や形を離れた真実そのものを本体としておられます。このように浄土の聖者方に平等なこの上なき徳を得させる平等力の阿弥陀如来を帰命したてまつれ)

(語意)

端正(よく整っていること) 精微妙軀(すぐれてこまやかなたえなる身体) 人天(人間・神々) 虚無之身(とらわれるべき実体のない身、法身のこと。無極体も同じ)

* * *

D「このご和讃は前の

安樂声聞菩薩衆

人天智慧ほがらかに

身相莊嚴みなおなじ

他方に順じて名をつらぬ

のご和讃とは一連のものです。今回の和讃では、まず浄土に生まれたお方は非常にすばらしいお姿をしておられる、といわれます。この世の人間や神々とは比較にならぬほど勝れている、とたたえられています」

N「こういう話はどこに出ていますか」

D「曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』に

顔容端正にして比ぶべきなし。精微妙軀にして人天にあらず。虚無の身無極の体なり。このゆえに平等力を頂礼したてまつる。

とたたえられています。ただ、この文のものは仏説無量寿經に説かれています」

N「仏説無量寿經ではどういう内容になっていますか」

D「このことは後で申しますが、まず阿弥陀仏の四十八願

の中に、

法蔵菩薩

は衆生が

浄土に生

まれたら、こういう身にせしめたいと願われた願があり、その願いが成就して、浄土に生まれた菩薩の姿がどのようなものなのかは、經典に説かれています」

N「どうい願ですか」

D「第三願の〈悉皆金色の願〉、第四願の〈無有好醜の願〉、第二十一願の〈三十二相の願〉などです。浄土に往生したお方は、

(第三願) たとい我、仏を得んに、国の中の人天、ことごとく真金色ならずんば、正覚を取らじ。

(第四願) たとい我、仏を得んに、国の中の人天、形色不同にして、好醜あらば、正覚を取らじ。

(第二十一願) たとい我、仏を得んに、国の中の人天、ことごとく三十二大人の相を成満せずんば、正覚を取らじ。

の願が成就して、浄土に生ま

《 念佛寺永代経法要 》 四月二十二日 (金)

午後二時始

法話 丸山 顕子 先生

(以前NHKラジオで先生の歩みが放送されました)

* 同日 (四月二十二日) 午前十時・勤行法話

(念佛寺住職の法話です)

れた方のお姿はすべて皆金色に輝き、形に美醜の差別がなく、仏の三十二相という非常にすばらしい特徴を具えておられる、と經典に説かれています」

(注。三十二相とは、仏の顕著な三十二の姿。たとえば青い澄んだ瞳とか眉毛の間から光を放つなど)

N「なぜこのようなことが法蔵菩薩の願いだったのでしょうか」

D「それはまず衆生が浄土に生まれたいと願うようにと、仏の身の功德をこのような姿として私たち人間に対して説かれたのだからです。

金色の身というのは感覚的にはこの世では金色に輝くということはもつとも素晴らしい姿ですから、私たちはそれを聞いて、浄土に生まれたいと願うようになってまいりました」

N「では浄土では好(美)醜

が無く、皆金色だとのことですが、なぜ美醜の無いのを願われたのでしょうか。」

D 「それは、私たちがいかに美醜の相違でお互いに苦しみ傷つけあっているかを観察されて、救おうとの大悲を起こされたからだろうかがあります」

N 「姿や色や形の上での差別の問題なのですね」

D 「ええ、たとえば白人、黄色人種、黒人という肌色の違いは、優越感とか劣等感を起こします。人を肌色によって差別してきた悲しい歴史がありますね。ことに古代インドでは肌の色の違いが階級の上下にまでなり、現代にもそれは影響しています。また、アメリカなどの黒人問題の根には肌色の問題が根強く残っていて、人びとの差別観を助長し、これによって理屈では人間皆尊く平等であるといっても、実際はそうはなっていない。それでいつまでも差別に苦しむ人たちが大勢いることになりました。」

また個人においても自分の姿や容色が美しいと、自惚れたり誇ったりし、逆ですと劣等感を持つたり卑屈になったりします。私たちは他者を見ると、その人の行いの善悪

だけでなく、その人の見栄えの良し悪しにとらわれがちです。結婚するときにも容貌の良し悪しにとらわれて、喜んだり嘆いたりしていますね」

N 「人間は姿形の良し悪しにとらわれてずいぶん煩い悩んできたのですね。そういう人間の悲しみを法蔵菩薩様は知りぬいて下さっていて、浄土に生まれた者は美(好)醜をこえた素晴らしい相にすべて皆をなさしめてたいと誓われたのですね」

D 「ええ南無阿弥陀仏の中にはそういう願いがこもっており、それを実現して下さるのです」

N 「美醜を超えた素晴らしい姿にしたいといわれるのですが、どういう姿なのでしょうか」

D 「それは、たとえば仏の姿である三十二相などと云われています。浄土に生まれた者はすべて金色で三十二相という勝れた姿になると説かれています。ただ、それを内面的な意味としてうかがいますと、浄土の菩薩は美醜の想念を起こしたり、それにとらわれたりしない智慧を完成されたお方だともいえましよう。この世においても深い悟りを

成就したお方は、人びとや諸物の上の美醜の違いやさまざまな差違を超えて、万人・万物の上に、等しく尊いいのちの尊厳を感得すると説かれています。ということは、美醜を作り、それに執われ、差別に苦しんだり喜んだりする、その原因は凡夫の心にある比較し差別する煩惱に原因があるからです。ですからこの世で悟りを完成された釈尊には美醜の執われはなかったといわれます。万物の上に等しく尊い輝きを見ておられたのでありましよう」

N 「悟ったお方はものの見方や感じ方が変わるといことですね」

D 「ええ、それで釈尊は悟られたとき、〈奇なるかな、奇なるかな、草木国土悉く成仏せり〉と叫ばれたと伝えられています。万物に尊い仏の働きを感得されたのですね」

N 「美醜は、ものそのものに初めからあるのではなくて、ものを見て、そこに美しいとか醜いと汚いとか綺麗とか、差別的に見るこちら側に一番問題があるのですね」

D 「ええ、根本から云えば、美醜は人間の心(凡心)が作り出したものと云えましよう」

N 「では浄土に生まれた菩薩

には煩惱がありませんから、そういう差別を作りだすこともないのでましようね」

D 「ええそういわれています。ですから浄土の菩薩には、美醜が無く、全て金色に輝くといわれるほど尊い身になるといわれているとともに、浄土の菩薩は万物を美醜的差別によつて見るのではなくて、万物を平等に尊く輝いていると見る眼を成就されたお方であるともいえましよう」

N 「浄土の菩薩の姿は人間や神々(人天)をはるかに超えた素晴らしい身なのです」

D 「ええ、それをここで精微妙軀といわれて、色や形が極めて妙なるお姿であると説かれています。またその一方で、仏の身の本質は何かというと〈虚無之身無極体〉と説かれています」

N 「虚無之身無極体という言葉は難しいですね。どこにある言葉ですか」

D 「曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』のもとになった仏説無量寿経の中です。そこには浄土の菩薩は、

顔貌端正にして、世に超えて希有なり。
容色微妙にして、天にあらざ人にあらず。みな、自然虚無

の身、無極の体を受けたりと説かれています」

N 「虚無の身、無極の体を説明して下さい」

D 「虚無の身も無極の体も同じ意味で、色や形の無い、色や形を超えたきわまりのない尊い身ということでしょう。この場合の身は姿や形があるという限定、それを超えた無限定な身といえましよう。それは、心で思いはかることも、言葉で言い表すこともできない身であつて、あえて云つてみれば〈はかりなきいのちそのもの〉といえるでしょう。ただし、いのちといっても単なる自然界の生命とだけいうのではなくて、無量の光明といわれる智慧と慈悲のかぎりない功德が具わっている(いのち)と、お聞きしています。仏教の伝統の言葉で言えば『法身』です」

N 「さきほどは浄土に生まれたい方は、そのお姿が金色のように光り輝き、人や神々とは比較にならないほどの素晴らしい身であるとお聞きしましたが、ここでは色も形を超えたきわまりのないのちそのもの、といわれました。この関係はどうなのですか」

D 「法身は浄土の仏(菩薩)

の本質であって、色も形もない無限定なはたらき（身）といわれます。限定されないということは、そこから限定された形がさまざまに現れてきましよう。法身が色も形もないままで動きが取れないというのなら無限定とはいえませんが、無限定ゆえ限定されることなく、さまざま相や形がそこから現れてまいります。

衆生を救済すべく、法身に具足している無量の智慧と慈悲の徳が衆生に救済力として展開し働き出される、その代表的な仏様が阿弥陀仏（報身）であり、さらにさまざまに姿を表して、たとえばこの娑婆世界に釈迦如来として誕生して下さった仏、そういう仏身を（応身）といわれます。浄土に生まれて浄土の悟りを開かれて浄土の功徳を身につけた浄土の菩薩は、法身の徳がさまざまに現わすお姿であるともいえましよう」

N 「色も形もなき法身は、さまざまに形を取って活動して下さるといえるし、逆にさまざまな浄土の仏・菩薩は、その本は法身のはたらきであるといえるのですね」

D 「ええ。ですからさまざまな色や姿や形をされていても、

皆平等であり、智慧と慈悲といのちを本質とした素晴らしい功德の身であるといえます」

N 「難しいお話しですね」

D 「難しいですが、別にこういうことが分からなくても、南無阿弥陀仏をいただいて浄土に生まれるなら、そのときに明瞭になると説かれていきます。ですから分からなくても分らないまま、ともかくも南無阿弥陀仏となつて私に喚びかけて働いて下さっているお助けをいただくことが大切です。浄土の仏・菩薩のお姿がぼんやりしていても一向にかまいません。ぼんやりしたまま大事なことは、（我をたのめ、浄土に生まれさせる）との南無阿弥陀仏をたのむことの外にありません」

N 「要するにこのご和讃の趣旨は浄土に生まれたら、このような素晴らしい徳のお方にしていただけるんですよ。どうぞそれを実現して下さる南無阿弥陀仏をいただいて下さいといわれるのですね。では（平等力）とは」

D 「この世ではさまざまな差別や差違に苦しみ悩んでいる私たちが南無阿弥陀仏に助けられると浄土に生まれて、す

べて皆、平等に智慧と慈悲といのちのはかりなき徳をいただく。そして、衆生救済の活動を無窮にさせて下さる阿弥陀仏の本願、このお力をここでは平等力とたたえられているのです」

N 「平等と云うことは浄土に生まれてのみ知られることですか」

D 「いいえ、南無阿弥陀仏にであうと、すべての生きとし生けるものは阿弥陀仏のいのちのなかに平等に摂め取られていること、そしてそれが根本的な真実であり、最も尊いことであるというものの見方、感じ方へと価値観が、この世での生活の中で転じられていきはじめましよう。もちろんボツボツですけど」

N 「そうすると、平等に救いたもう阿弥陀仏の平等力のお徳はそれをいただくこの世の人の上にも少しづつ現れてくるということですね」

D 「ええそうですね。そう教えられてくると、人を、その姿や形などの違い、あるいは才能とか学歴とか家柄といった差違によって、差別することは罪深いことだと知らされてまいりますよ」

(了)

《住職雑感》

ロンドンの音楽アカデミーの教授がNHKの白熱教室という番組でセバスチャン・バッハについての話があった。バッハがドイツのライプツヒでトマス教会の音楽監督をしていた一八世紀の初め、毎日曜日の教会の礼拝は朝七時から十時までの三時間もあつた。その間、信者は讃美歌を歌い、祈とうし、聖書朗読を聞き、その後カンタータを聴く。使徒信条の信仰告白、そして牧師の説教（一時間）。また讃美歌と祈とう、という順番で、長いものだったそうである。バッハは毎週新たなカンタータを作曲し、それを聖歌隊に練習させて演奏したという。大変多忙な生活をしていた。カンタータはそのときに取り上げられる聖書の内容にそつた曲で、おそらく牧師の説教よりもはるかに信者の胸にうったえたのではなからうか。ルターが「音楽は神の贈り物」と言ったように、音楽ことに宗教音楽は宗教心情を昂揚させ、人の心を永遠なものに誘う。トマス教会の信者は広い教会内で、冬は暖房もわずかであり、しかも堅いイスに三時間も坐つての礼拝に毎週参加していたのである。当時のドイツの教会の姿がよく分かる。トマス教会の信者は毎週バッハの新しい教会カンタータを生で聴くことができたのだから何とも羨ましいことである。

《遠方法話予定》

- *三月三日。名古屋別院。午前十時始
・午後（座談有り）
- *三月十一日。福井別院。午前十時始
・午後（座談有）
- *四月十日〜十一日。広島市安芸区。龍善寺。午後より。
- *五月十九日〜二十一日。福井別院。
朝事後・午後法話座談
- *五月二十三日。名古屋別院。午前十時始・午後（座談有り）
- *六月四日。福井別院。午前十時・午後（座談有）
- *七月九日。福井別院。午前十時・午後（座談有）
- *七月十四日〜十五日。石川県鳳珠郡穴水町。法琳寺。午後より。
- *九月四日。岩手県釜石市。寶樹寺。午前十時より正午まで。
- *十月十三日〜十五日。福井別院
朝事後・午後法話座談
- *十月二十三日〜二十五日。札幌別院。
詳しくは念仏寺にお尋ねください。

《お知らせ》
四月二日の念仏座談会
は休みます。

《お知らせ》
三月六日の聖典学習会
は三月五日（pm7時）
に変更致します。

信心夜話

《春季彼岸会法要》
三月二十二日（火）午後二時始

信心の名著『信者めぐり』に

臨終まぎわの厚信の和兵衛同行を、三河（愛知県）にたずねた丹波（兵庫県）の三田源七さんが、和兵衛同行に

「いよいよその身におなりなされては再び御全快は出来すまいが、今いよいよ出で行かにならぬがと思いなされたら、先は明るいものでございますか、暗いものでございませうか」

と問うた。すると骨と皮になっていた和兵衛同行がニッコリ笑うて、

「後生は明るいかと云えば明あこうもなし、暗いかと云えば暗くうもなし、唯病気が苦しき一つよりないわいの、もしも明るい暗いを、この方で見にやならぬようなら、無になる御方があるで、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

と、苦しい中で、源七同行の問いを如来聖人のご催促といただいて、我身のしあわせを喜んでお念仏を称えられた。

そばにいた親族で聞法者の政四郎さんがそれを見て、

「このご大病のうちに念仏称えなさるは、ご恩と申うて称えなさるか」

と尋ねたれば、その時病人お声を張り上げ、「政四郎さん政四郎さん、往生は仏仕事と聞かせてもらいう上からは、機の上のことは聞かぬでもよいわいの！」

このお答えがなんとも云えぬ嬉しかった、とある。

*

*

（この和兵衛同行の言葉は信仰史上に残る尊い言葉であると思う。故内山興正禪師もお話の中で、この言葉を出しておられたから、真宗の人でなくても感銘の深い言葉であると思われる。和兵衛同行は今にも死にそうなきしみの中、こころに真宗の言葉を言い、お慈悲を喜んで、ここにも真宗信心のすごさが証しされていると思う。

ところで、自分の救いにおいて、自分の心の「明るいか暗いか」を自分で見て、そこに自らの救いのしるしを見ねばならぬようなら、それは阿弥陀仏のご恩（五劫思惟、兆載永劫の御修行）を無にしてしまう。聞法して自分の心が明るかったら、これで大丈夫と思ひ、暗かったらまだダメだといふのは、自分の心の明暗によつてお助けが決まるように思っているからである。それは、自分の心のありさまがお助けの条件のように思ひ、又お助けに間に合うように思ひ、自分の心に価値をつけているからである。

日々の聞法生活の中では自分の心のあり様を知らせていただき、自己反省をするのは結構であるが、いよいよお助けの一段になるとはや自分の心の善悪・虚実・明暗は一切問う必要はない。「まるまる引き受ける」との大悲の仰せをおおぐだけである。いつまでも自分の心のあり様にこだわらない、自分の心が救いの役に立つと、どこかで思っているからである。

自分の心を手放して弥陀をたのむのである。弥陀の大悲を聞くとき手放さざるを得るのである。南無阿弥陀仏が私に何を告げて下さっているか、それを聞かないから、自分の方に目がいくのである。まだ自分の心に見込みがあると思つて、まだ目がいくのである。我が心は地獄へ引き入れられるから、そんな心に相談しようとするから、いつまでも如来を無視してしまうのである。

政四郎さんが和兵衛同行に、お念仏の称え心を「ご恩を思つて称えているかどうか」と尋ねているが、和兵衛同行はそんなことにまったく用はなくなっているのである。ただ如来様の「まるまる弥陀が引き受ける」との有難さからおのずからお念仏を申しているのであつて、自分がどう思ふかどう思ふかにまったく関係は無くなつて、

「往生は仏仕事」と聞くほかに信心はない。往生に関しては私（凡夫）の側にはチリばかりもなすべきことはないし、チリばかりも自分のものはたのみにはならない。有難いことに私の助かることは如来様が受け持たしたものである。

聖人が『ご消息』に「ともかくも、行者のはからいをちりばかりもあるべからず候えばこそ、他力と申す事にて候え。」と仰せ下さったのはこのことである。まさに「他力」によつて助けていただくのである。弥陀の誓願不思議に助けられる外にはない。

「機の上のことは聞かぬでもよいわいの！」と声を張り上げての一言が有難い。如来様は私の側に一切「こうなりなさい、あんなりなさい」とのご注文はなく、すべて阿弥陀仏が責任を持つて私を引き受けて下さる。私には私自身を助ける力も心も徳も善もない。まるまる助からぬダメな奴である。

「かつて一善もなし」と『仏説無量寿経』にあるごとく、浄土に生まれるタネになるような、お助けの足しになるような「純粋な善は一善もなし」と阿弥陀仏は見抜いておられる。知りぬいて成就して下さつた南無阿弥陀仏である。私の方で余計なものを加えようとすると、阿弥陀仏のご恩を無にしてしまうのである。重いご恩を軽んじているのである。

実はそれが一番の罪である。罪の中の一番の罪は弥陀のご恩を無視し、素直にいただかないことである。私たちは阿弥陀仏の真実を無視し、受けつけず、反逆して、流転してきた、そしてそのことも知らないものである。

そんな私たちに「汝は誹謗ひぼう正法の助からぬ機」であると私たちの機の姿を知らせて下さる。同時に「そんな者をこそ見捨てない南無阿弥陀仏であるぞ」と底抜けの大悲を告げて下さる。それが一声の南無阿弥陀仏、お念仏のお声である。「助ける」「引き受ける」のお声である。このお声を聞くばかりである。

（了）

